


## 二〇一二年度春季企画展

### 「戦地に逝ったワセダのヒーロー——松井栄造の二四年——」

望 月 雅 士

二〇一二年度の春季展は、戦前・戦中の中等学校野球と東京六大学野球のスター選手で、中国戦線で戦死した松井栄造（一九一八～一九四三年。一九四一年二月商学部卒）をテーマとする企画展を開催した。岐阜商業時代に選抜二回、夏一回の甲子園大会優勝を果たし、早稲田進学後もその華麗なプレーで神宮を沸かせた松井は、球史に残る伝説の野球人と言ってよいだろう。しかしその華やかな二四年の歩みは、まさに二〇世紀前半の戦争の時代と重なり合うものだった。

ドイツが連合国と休戦協定を調印し、第一次世界大戦が終結する前日、松井栄造は浜松の田町に生まれた。早稲田の戸塚球場で開催された全国少年野球大会で優勝して野球関係者の注目を浴びたのは、満州事変前夜のことだった。国際連盟脱退で騒然とする中で始まった甲子園選抜大会では、「明石の怪童」楠本保に投げ勝って岐阜商業を優勝へと導き、その三年後、夏の甲子園大会で優勝して深紅の大優勝旗を捧げ持った頃、世界の関心はスペイン内戦勃発に集まっていた。



選抜2回、夏1回の甲子園優勝を果たし、  
早稲田に進学後もその華麗なプレーで神宮  
を沸かせた松井栄造。中国戦線で壮絶な戦  
死を遂げるまでの24年の軌跡を追う。

2012年度春季企画展

# 戦地に逝った ワセダのヒーロー

## 松井栄造の24年

2012年3月21日(水) ~ 4月21日(土)

10 ~ 17時 (入館は16時30分まで) 日曜休館 \*但し3月25日(日)・4月1日(日)は開館(10~16時)

早稲田大学早稲田キャンパス2号館 1階企画展示室 入場無料

早稲田大学大学史資料センター  
TEL03-5286-1814 <http://www.waseda.jp/archives/>

早稲田に入学した年の六大学秋季リーグで初陣を飾った時、盧溝橋事件から始まった日中戦争は上海で激戦となっていた。東亜競技大会に全日本代表で出場した頃、ヨーロッパではヒトラー率いるドイツが西部戦線で進撃を続け、まもなくパリが陥落した。そして太平洋戦争開戦で世情が沸き立つ中、繰上げ卒業で早稲田を去り、見習士官として投入された日中戦争の最前線の戦場で、肉弾突撃の最中、突如人生の幕を閉じることになる。

松井栄造の生涯は、砲煙の立ちこめる時代の中で、まさにスポットライトに照らされ続けた二四年だった。この松井の軌跡を追うことで戦争の現実を改めて問い直したいというのが、本企画展開催の趣旨である。

本企画展は当初、二〇一一年三月に開催を予定していたが、東日本震災のため二〇一二年度に延期し、二〇一二年三月二日から四月二日までの日程で開催した。企画展終了後、遠州稲門会と磐田市立図書館共催、当センター後援で、六月二日から七月三日まで磐田市立図書館において出張展が開催された。

早稲田での企画展の来観者は、三〇日間の会期中二〇六二名を数え、また磐田市での出張展は九日間で一二〇〇名を超えた。

本企画展は、岐阜新聞二〇一一年二月二日付、中日新聞二月二九日付、岐阜新聞二〇一二年三月二四日付、東京新聞四月五日付、中日新聞四月六日付、朝日新聞岐阜版四月一日付で、出張展に関しては、中日新聞六月二三日付、静岡新聞六月二四日付、朝日新聞静岡版六月二九日付で、いずれも写真入りで報道された。なお、静岡新聞で八月七日から一〇日まで、「戦場に消えたエース 松井栄造の青春」が四回にわたって連載された。またSBSテレビ（静岡放送）の八月一〇日のニュース番組、およびTBSテレビ八月一九日の「報道の魂 8・15終戦 記者たちの眼差し」でも放映された。

〔付記〕 松井栄造の実弟清水昇氏所蔵の松井の遺品類は、企画展終了後、当センターへ寄贈された。また、松井の親友長良治雄の遺品中、愛用のバットとボールが長良君子氏（治雄妻）より、当センターへ寄贈された。

### はじめに

日中戦争の勃発から、今年で七五年。解決の糸口の見えない泥沼状態となったその戦争は、四年後にはアメリカを敵とする破滅の戦争へと突き進んでいく。

中国との戦争がはじまった年、ワセダの野球部にひとりのルーキーが入部した。選抜二回、夏一回の甲子園優勝を果たした注目の新人、松井栄造である。ワセダでの五年間、その端正なマスクと華麗なプレーは、戦時色に塗り固められた世相とは対照的に、神宮球場を歓声の渦へとつつみこんでいった。

持てる才能を活かして可能性に挑戦し、多くの人びとに歓喜を与えつづけたその個性は、けれども一発の銃声によって突如失われることになる。

輝きに満ちた生の軌跡に戦争の爪痕が刻みこまれた松井栄造の二四年をふりかえり、私たちの記憶から薄らぎつつある戦争の現実を、敗戦から六七年の今、改めて問い直したい。

## 一 少年時代

松井栄造は一九一八年一月一〇日、浜松市田町でもじと額縁を商う松井半次郎と多喜子の子として生まれた。野球が盛んな浜松で、松井少年は浜松元城尋常高等小学校三年からボールを握り始めた。ベーブ・ルースに憧れて練習に励むうちに、少年は瞬く間に天性の才能をあらわした。一九三一年夏、早稲田の戸塚球場で開催された全国少年野球大会A組に投手として出場すると、強豪校を倒して優勝。元城小は松井の好投で全国大会連覇を果たした。

日本全国が野球で熱狂していた時代、中学野球界での松井の活躍を見越したスカウト合戦がはじまった。野球有名な校の校長らが相次いで松井家を訪れ、金銭の話も飛び交った。だが、岐阜市立岐阜商業学校野球部後援会長で建築家の遠藤健三が出したスカウトの条件は異例だった。——金銭は一切出さないが、栄造少年を一人前の人間として育て上げ、大学卒業まで責任を持つ——。最愛の息子の将来を考えた父は、遠藤に栄造を託すことを決めた。満州で砲煙がのぼりはじめる頃のことだった。

## 〔展示資料〕

## ○アルバム

清水昇氏所蔵

松井家に遺されていた日記をはじめとする栄造の遺品類は、一九四五年六月の浜松の大空襲で失われた。だがアルバム類だけは、空襲を懸念した両親が事前に親戚に預けて戦火を逃れた。

## 二 岐阜商業時代①

遠藤健三の下で育てられることになった松井少年は浜松を離れ、岐阜市金華尋常高等小学校高等科一年へ転校し、翌一九三二年岐阜市立岐阜商業学校に入学、同時に野球部へ入部した。子供に恵まれなかった遠藤夫妻は松井をわが子のようにかわいがりながらも、父半次郎との約束を果たすため、健三は少年を厳しくしつけた。それを陰でやさしく労わったのが妻の道子だった。

松井二年の春、村瀬保夫主将率いる岐阜商業は全国選抜中等学校野球大会に出場、強豪明石中学を決勝で破り、優勝した。十四歳ながらも、松井は勝利投手に輝いた。この決勝戦で、松井の左腕から繰り出されるインドロ（縦に鋭く落ちるカーブ）は三尺（約九〇センチ）落ちたとの評判が広まり、以後「三尺」が松井のあだ名になった。

一九三五年春、全国選抜野球大会で岐阜商業は二度目の優勝を成し遂げた。準決勝と決勝は一点差の熱戦となった。とくに準決勝の愛知商業との試合は雨天再試合の激闘が繰り広げられた。投打に活躍した松井は優勝後のインタビューで、チームの勝因を「一致結束」にあると語った。チーム力で勝つ、これが岐阜商野球の真髄だった。

## 〔展示資料〕

○遠藤健三編『遠藤道子遺稿 歌集 川砂』

一九四六年 大学史資料センター所蔵

遠藤健三の妻道子の歌集。遠藤道子は山下陸奥に師事し、和歌をよくした。

○アルバム

清水昇氏所蔵

○松井栄造サインボール

岐阜県立岐阜商業高等学校所蔵

よろこびの言葉かくればうつむきて

涙ぐみをり少年松井は

遠藤道子

一九三三年作

### 岐阜商業時代②

一九三六年度、松井は岐阜商業最後の学年を迎えた。岐阜商はこれまで春は五年連続で出場し、うち二度の優勝を果たしながらも、夏の全国大会予選の東海大会では敗退が続いた。主将となった松井は親友の長良治雄とともにチームの牽引役となり、初出場・初優勝を胸に誓い、日々の猛練習に励んだ。投打に卓越した岐阜商業は強豪校のひしめく東海大会を勝ち抜き、全国中等学校優勝野球大会初出場を果たした。

甲子園大会を岐阜商は一回戦から圧倒的な強さで勝ち進んだ。決勝は過去二度の準優勝を誇る平安中学戦。岐阜商

は松井のピッチングで平安中の打棒を一点に抑えて圧勝し、全国制覇の栄冠に輝いた。栄えある深紅の優勝旗をささげ持つ松井ら岐阜商メンバーの凱旋は、岐阜の市民たちを熱狂の渦に包みこんだ。

一試合十三塁打（本塁打一・三塁打三）。一九三六年度夏盛岡商業戦の記録を打ち立て、松井は甲子園を後にした。次なる目標は実力、人気ともに日本最高峰の東京六大学リーグ戦。早稲田への入学が決定した松井は、慶應へ進学する長良治雄と早慶戦の舞台で熱戦を繰り広げることになる。

〔展示資料〕

○近藤清「夏休の日記」

一九三六年七月二〇日～八月三十一日 近藤幸義氏所蔵

岐阜商業二年の近藤清の「夏休の日記」。近藤はシヨートを守り、決勝戦では一打点を挙げた。甲子園制覇へと至る日々の練習と、試合にのぞむ心情が綴られている。

近藤清「夏休の日記」 一九三六年八月二〇日付

「……岐阜商業が勝ったのだ、優勝したのだ。どんよりと曇ってはいるが、サイレン高らかに鳴響き、我々はどう胸にこみ上げてくるものを感じた。

終に雌伏十二年、夏の甲子園制覇の待望が達せられたのだ。殊勲者松井が、あの真紅の大優勝〔旗〕をうけに行く時、松井君の最後の大会をかざってやった選手一同も、自分が全部の技倆を発揮して優勝出来た彼も、どうして喜ばずにはいられないだろう。僕はもうたまらなく嬉しく、泣きたくなった。……」



○優勝記念ボール

一九三六年夏 岐阜県立岐阜商業高等学校所蔵

○第二二回全国中等学校優勝野球大会優勝旗

一九三六年夏 岐阜県立岐阜商業高等学校所蔵

○「岐阜商業優勝記念帖上下 昭和十一年八月十三―二十日」

岐阜県立岐阜商業高等学校所蔵

○松井栄造揮毫「誠実に優る智慧なし」

岐阜県立岐阜商業高等学校所蔵

炎天下の球を追ふ子のユニフォームに

お守袋しかと縫ひつく

遠藤道子

一九三六年作

## 三 早稲田大学時代①

一九三七年四月、松井は早稲田大学第二早稲田高等学院に入学した。甲子園優勝投手の野球部入部は、野球ファン  
の関心を神宮へと惹きつけた。松井の六大学リーグ戦のデビューは、中国との戦争がはじまり、連日の新聞紙面に「進  
撃」や「占領」の文字が躍るなかで開催された秋季リーグ戦、早稲田の初戦立教大学戦となった。白熱したゲーム展  
開の中、同点で迎えた九回裏、松井は若原正蔵からマウンドを引き継ぎ、延長一一回立教の打線を無得点に抑え、初  
陣を勝利で飾った。

翌三八年七月、日中戦争下の非常時が叫ばれる中、早大野球部はハワイ遠征の途に立った。アメリカ海軍チームと  
の試合など、松井ははじめ部員たちはひと月におよぶハワイでの日々を満喫した。

三九年四月、松井は早稲田大学商学部に進学した。バッティングのセンスの良さを買われた松井は肩を痛めていた  
こともあり、このシーズンから打者へと転向した。小野欣助や辻井弘ら同期のライバルたちと猛練習を重ね、以後卒  
業までの三年間、早稲田の主力バッテリーとなっていく。

この年の秋ごろから、作家尾崎一雄との交流がはじまった。文学が好きだった松井は尾崎と会うのが何よりも楽し  
みだった。尾崎も松井の文武に秀でた才能を愛した。二人の交流は戦地での文通まで続いていく。

## 〔展示資料〕

○アルバム「昭和十二年度 新人北海道遠征記念 早稲田大学野球部」

一九三七年 清水昇氏所蔵

○アルバム「布哇遠征記念写真帖 早稲田大学体育会野球部」

一九三八年 清水昇氏所蔵

○松井栄造書翰 尾崎一雄宛

一九三九年一〇月一二日付 県立神奈川近代文学館所蔵

「尾崎さん。唯今は全く愉快な一時でした。白鉢巻の下にかくされた眉毛が絶へず気になり乍らも、貴方の口から洩れるユーモアたっぷりなお話に、誠、全精神を耳に集中して楽しく聞入った事でした。……」

## 早稲田大学時代②

一九四〇年六月、紀元二六〇〇年奉祝東亜競技大会の日本代表に、松井は小野欣助らとともに選出された。六大学リーグのライバル明治からは、岐阜商業の後輩加藤三郎が選ばれた。対フィリピン戦加藤の放った快音に、松井は久しぶりに歓声を挙げた。

松井のプレーはしばしば「華麗」と形容され、多くのファンを魅了した。一九四〇年春の早慶第一回戦九回裏、決

勝点となったスクイズ。同二回戦左飛を本塁へのバックホーム。同年六月東亜競技大会ハワイ戦での代打レフト前ヒット。同年秋早明戦での三塁前バント。四一年春の早慶一回戦満塁での三塁打……。

一九四一年度は松井の最終学年、翌四二年三月が卒業予定だった。だが米英との関係が緊迫する中、一九四一年一月一日公布の勅令により、大学学部等の在学修業年限が短縮された。松井たち最高学年の一二月繰り上げ卒業が決まったのである。

勅令公布の翌一七日は、早稲田の五シーズンぶりのリーグ優勝をかけた立教戦。松井は絶妙のバントで先取点をたたき出し、勝利に貢献した。松井は優勝の興奮を、捕手として石黒投手をリードした最愛の後輩近藤清、そして新人の近藤を捕手として育てあげ、この試合控えに回った小野欣助らとともに味わった。

松井は成長した後輩に早稲田常勝を託し、太平洋戦争開戦で街頭が沸き立つ中、神宮と早稲田の杜を後にした。

[展示資料]

○NIPPONユニフォーム 松井栄造着用

一九四〇年 静岡縣護國神社所蔵

○早稲田大学野球部ユニフォーム 小野欣助着用

大学史資料センター所蔵

## ○松井栄造書翰 近藤清宛

(一) 年六月二十七日付 近藤幸義氏所蔵

「小生婦りが遅くなつて貴君熟睡の様子でしたので、明朝勝手乍ら貴君御起床次第小生を起して下さい。貴君のお話も承りたいし、小生も話がありますので、是非お忘れなき様お願い致します。」

## ○松井栄造書翰 尾崎一雄宛

一九四一年五月一二日付 県立神奈川近代文学館所蔵

「…最近のワセダの学生にはワセダを思ふ熱の少い奴があつて憤慨に堪へません。この間も僕の部屋へ遊びに来た一人が、『野球を見物するのはスコアボルドの前に限る』と言ふから、『どうして?』と尋ねると、『応援しなくていいから。』ぶんなぐつてやりたくまりました。母校の名譽をかけての戦士を前にして堂々この言をはき得る奴、もうこんな奴とは絶交だと腹の中でどなつてやりました。……」

## ○写経 松井栄造筆

一九四一年夏 静岡縣護國神社所蔵

## ○アルバム「昭和十六年秋季リーグ戦優勝記念 明治神宮大会三連覇記念 早稲田大学体育会野球部」

一九四一年 清水昇氏所蔵

森本多美子氏（松井栄造実妹）談

「兄の紀司（栄造の弟）が出征する日、早稲田の卒業を控えた栄造兄が浜松の実家に帰ってきました。すでに紀司兄は浜松駅に向かった後でしたので、栄造兄はすぐにその後を追いました。そして栄造兄は駅の改札口で、大勢の兵隊さんたちに交りプラットホームに消えていく紀司兄に向って、「紀坊、おれも後から行くからな」と叫んだのを、今でも覚えています。」

松井紀司は一九四一年二月一日、現役兵として歩兵第三十四聯隊補充隊に入営した。

大道（旧姓中島）信敏氏談

「松井栄造君とは、一九三七年野球部入部の同期です。松井君の投球、打撃、走塁、どのフォームをとっても華麗でしたね。自然に技量が備わった、天才肌のプレーヤーでした。同期二五人の中でも別格でした。人格も立派で、学生野球の真髄を全うした選手でした。伊丹安弘監督は、松井君が生きていれば、早稲田大学野球部の監督を一度やらせたかったとおっしゃっていました。」

#### 四 戦死①

早稲田を卒業した松井は都市対抗野球の強豪藤倉電線に就職するが、翌一九四二年二月一日、歩兵第三十四聯隊に

現役入隊した。わずか一〇日ほどの会社勤めだった。同年五月豊橋陸軍予備士官学校に入校し（甲種幹部候補生）、一〇月卒業。戦地へ赴く直前、松井は早大野球部の合宿所を訪れた。六大学秋季リーグを早稲田は優勝で飾ったものの、再び神宮でプレーできるのか、部員たちが日々不安に苛まれる中での再会だった。

同年暮、見習士官として中国に渡った松井は、年を明けると大別山作戦、四月からは江南作戦に参加した。山岳地帯での激戦が続いた。うち続く戦闘の中でも、松井は本が読みたかった。ハーモニカを奏でたかった。そして弟紀司のこと、六大学野球の前途が案じられてならなかった。

一九四二年二月十八日 松井紀司、ガダルカナルで戦死。

一九四三年四月二十八日 東京大学野球聯盟、文部省の要求に従い、解散を決定。

五月二十八日、湖北省宜昌の西、姚家坊付近での夜間の戦闘、敵の機関銃が待ち構える中での肉弾突撃だった。小隊長として「突っ込め」の号令をかけた松井は、部下を指揮して突入、一発の銃弾が頭部を直撃した。午後一〇時一分のことだった。

戦地に出立する直前に松井がしたためた遺書には、「戦死の事を知りましたならば、勇敢に戦って戦ひ抜いて微笑って死んで行った雄々しい姿を想像して下さい。……」と綴られていた。

## 〔展示資料〕

○アルバム「大東亜戦争従軍記念 浜松市統後奉公会」

清水昇氏所蔵

○日章旗 贈松井栄造

岐阜県立岐阜商業高等学校所蔵

早大と岐阜両野球部関係者の揮毫によるもの。

○松井栄造書翰 尾崎一雄宛

一九四二年六月二四日付 県立神奈川近代文学館所蔵

「……御本折角送って頂いて喜んで読まうと思っても読む事が許可されず、結局私物として取りまとめられてしまひました。取りまとめられる前に一寸開いた箇所が『不良少年』といふところ、走り読みして満足して居ります。故郷から面会に来ました折に持って行って貰ひます。やがて読む事の出来る日も来ます。……」

○松井栄造書翰 近藤清宛

一九四二年九月二五日付 近藤幸義氏所蔵

「……リーグ戦はどうですか。考へ違ひの上級生振りをいましめる様、あくまで新鮮味を失はないで頑張つて下さい。森君は如何。もうそろそろ頭角を現はす可き時機だね。力を合せてよろしく頼むよ。……」



## ○松井榮造書翰 松井弘次宛

一九四三年 清水昇氏所蔵

「支那の生活にも大分馴れて来ました。支那語も次第に覚えて来ました。不自由なことはありません。唯本の無いこと丈が不自由です。何か送って下さい。中央公論か改造か、文藝春秋か、何か毎月送って頂けると都合が良いですが。一冊でも良いです。きまつたものがよいです。短歌研究でもいいです。それとマイナーハーモニカを送って下さい。ナチュラルマイナーと二本頼みます。子供だましの様な慰問袋はありません。紀坊の所属部隊を知らせて下さい。……」

## ○松井榮造書翰 松井弘次宛

一九四三年 清水昇氏所蔵

「……川田順著隨筆集 偶然録 至急お送り下さい。尚煙草ケース(二十本入)、万年筆を紛失してしまつたから頼みます。…… 諷詠十二月 三好達治著、若し良いと思つたら、これも頼みます。」

## ○松井榮造書翰 尾崎一雄宛

一九四三年 県立神奈川近代文学館所蔵

「……今春リーグ戦はどうなるのですか。無くなつてしまつとか、そんな話もききました……小生等今や中支第一線警備田舎の支那家屋の土間に寝起して守りに就いて居ります。」

電気は勿論なく、ローソク光丈にはいさゝか憂鬱です。生命には未だ別条ありません。生ある限り運動精神を發揮

して頑張ります。」

○松井栄造書翰 松井弘次宛

一九四三年 清水昇氏所蔵

「出した手紙が往ったきり何の返事ももたらさないのはどうしたことせう。三通出している筈ですが。中支も雨期に入ります。途はどろ／＼になります。ニュース映画の通りです。又旅に出ます。―藤の花咲く頃―」

兄弘次は、詩集とハーモニカを戦地に送るため荷造りしたものの、郵便局で断られた。戦局悪化で送り届けることができないとの理由だった。兄は終生、弟の望みをかなえてやれなかったことを悔いた。

○遺書

一九四二年一月二日 静岡縣護國神社所蔵

「……今、幸福であった過去の幾年かを心静かに振り返って感慨を新にして居ります。そして吾身の総てを捧げ尽くして以って海山に比す可くもない其の御恩に報ゆるの覚悟を益々固めて居ります。戦死の事を知りましたならば、勇敢に戦って戦ひ抜いて微笑って死んで行った雄々しい姿を想像して下さい。

最後の外泊より帰る前の晩、楽しく聴いたレコードの歌の数々が時に思ひ出されて心を振り起して呉れます。戦場に在っても、若し危険な場合に立至って尚音楽に心を傾ける余裕があつたならば、きっと志気を鼓舞して悠々たる決意を導き出して呉れるものと信じて居ります。……」

## ○鉄帽覆

静岡縣護國神社所藏

松井栄造が戦死時に被っていた鉄帽覆。左上方に銃痕がある。

## ○郵便貯金通帳

清水昇氏所藏

戦地へ出立する際、松井はこの通帳を家に残しておくと言ったが、母が戦地でも貯金できるよう持参することを勧めた。戦死時、松井はこの通帳を身につけていたものと見られる。

## ○松井勲書翰 松井半次郎宛

一九四三年六月一日 清水昇氏所藏

松井勲は栄造の上官で陸軍士官学校出身の中隊長。栄造戦死の状況を手紙にしたため、父半次郎に送った。なお松井勲は、江南作戦後の常德作戦で戦死した。

「昭和十七年十二月早々、松井は『いよいよ』というとき、遠藤を訪ねる。その年四月、松井は陸軍幹部候補生試験に合格、ユニホームを軍服に着替えていた。遠藤は、陸軍少尉の正装をした松井を見て、すべてを悟った。

互いにくみかわすウイスキーが口に苦かった。『生きて帰ろうなんて、思うなよ』。ポツリ、と遠藤はいった。

その顔をのぞきこむように松井が答える。『はい、やります』。息を殺すようにしていた道子が、たまりかねて泣き伏した姿を、遠藤は、いまでも忘れてはいない。〔読売新聞〕一九七七年八月二日付〕

## 戦死②

松井戦死の一報が早大野球部に入ったのは、六月一日過ぎのことだった。近藤清が受けた衝撃は計り知れないものがあつた。「あと一年の学生生活を立派に了へて、必らず仇をとります」と、近藤は誓わないではいられなかった。沖繩戦最中の一九四五年四月八日、特攻出撃を前にした休暇で近藤は岐阜に帰り、遠藤健三のもとへ挨拶に行った。しかし遠藤の家に、道子夫人の姿はなかった。

その前年の十一月一日、道子は四二回目の誕生日を迎えた。同日生まれの松井が生きていれば、二六歳になっていた。翌二一日、道子は美濃町の法要に出かけ、その足で浜松の松井家を訪れた。松井の母に別れを告げ、そのまま行方を絶っていた。

そして……

一九四五年三月一日 小野欣助 台湾台中にて特攻訓練中事故死。

四月六日 加藤三郎 神風特別攻撃隊第一正統隊員として出撃し戦死。

四月二十八日 近藤清 神風特別攻撃隊第三章薙隊員として出撃し戦死。

五月二五日 長良治雄 沖縄へ弾薬を輸送中、米軍機の攻撃を受けて戦死。

昭和が終わりに近づきつつあった頃、毎年八月一五日の甲子園球場には、正午のサイレンとともに、ひたすら祈りをささげ続ける遠藤健三の姿があった。

遠藤健三（故人）談

「〔妻の道子が〕法要で美濃町まで出かけたまんま、姿を消してしまつたんや。松井の死が、ひとつシヨックやった。松井に会うといつては、よう靖国神社に出かけとつた。そのうえに……〔前年一月一日、陸軍士官学校生の甥が岐阜各務原飛行場で試験飛行中に事故死〕。道子には耐えられん寂しさだつたんでしような。みんな、子どもみたいに思つとつたから。たぶん、気持ちの限界を超えたんやろうなあ。」〔『読売新聞』一九七七年八月一三日付〕

○近藤清書翰 遠藤健三宛

一九四三年六月一日 岐阜県立岐阜商業高等学校所蔵

「……私達は岐阜商業入学以来、松井さんには親身も及ばぬ程面倒を見て戴き、何かにつけて心細かく御指導御鞭撻下さいまして、誠に夢にも忘れてならぬ、いゝ先輩でした。兄とも慕つた松井さんの為なら、水火をも辞せない気持だけは持つて居りましたが、斯様な事になりますとは落胆これ以上のは有りませんでした。でも松井さんは男子として皇国の為に立派にお役に立つて戦死なされた〔こ〕とを思ふとき、あと一年の学生々活を立派に了へ

て、必らず仇をとりますと誓はないではられませんでした。……」

森本多美子氏（松井栄造実妹）談

「兄栄造が亡くなってしばらくした後、遠藤の奥様が浜松の私たちの家にいらっしゃいました。母と私で出迎えました。家のすぐ裏手にお墓がありましたので、私が奥様を案内しました。家に戻ると、奥様は別れを告げられました。そして、そのまま消息を絶たれました。」

今日から見て不適切な表現も、資料の歴史的な性格を考慮し、そのままとしました。